

連載
第23回

福聚山史

池浦 泰憲 文
及川 一晋 編

大正から昭和にかけて

5、常円寺と奨学金事業

「日蓮宗真統会」と常円寺

現在、常円寺は「財団法人日蓮宗真統会」の事務所として、「真師法縁」の子弟への奨学金事業に携わっている。

大正十三年(一九二四)一月三十一日、当山第三十三世及川眞能師が、他一名の師とともに「財団法人日蓮宗真統会」の設立を申請する。同年三月二十五日文部大臣より設立が許可され、及川眞能師寄附の一万五百円と、他の師からの寄附千円の資産で始まる。設立の目的はその規約の第一章に「本會八日蓮宗眞師法縁ノ子弟ヲ教育スルノ費用ヲ給與スルコトヲ以テ目的トス」とあるように、眞師法縁の子弟への教育費 奨学金の給付であった。

ところで、「眞師法縁」とは、身延山第二千八世妙心院日眞上人(慶長六年(一六〇一)〜寛文七年(一六六七))を縁祖とする団体である。「法縁」とは、宗門の教育に功をなした師を「縁祖」と讃仰して、その教えや教義の「法脈」を伝承する僧や寺院の集まりである。こつした法縁が現在も日蓮宗には複数存在し、各寺院や宗門全体のつながりを支えている。常円寺が所属する眞師法縁は明治以降、及川眞能師等が中心となり維持され、常円寺がその本部事務所となってい

たのであった。こつした関係から、近世より受け継がれてきた眞師法縁を母体とする「日蓮宗真統会」の奨学金事業に常円寺が大きく関わっていくのである。

子弟教育の重要性

明治維新を迎え新しい国家と社会の秩序が形づくられてゆくのにともない、仏教各教団はそれに応じた組織の再構成を迫られる。その模索のなかで自教団の僧侶をどのように養成していくかという問題が大きな課題の一つとなっていた。

大正六年(一九一七)日蓮宗は開宗六五〇年を迎えた。その記念事業として、日蓮宗のほか本門・顕本・法華・本門法華宗などの日蓮系の各門流が合同して「こつにまとまろう」という気運が高まり、そのはじめとして、まず各門流の子弟教育から統合をはかろうという計画が持ち上がった。結局、この計画は頓挫し各門流がそれぞれに教育施設をつくることになるが、このことから教団にとって子弟教育のありかたがいかに重要な意味をもっていたかを知ることができる。このほかにも各地の有力寺院で学林が開設され青少年僧の教育に力が注がれていた。大正十三年より始まる「日蓮宗真統会」の奨学金給付は、こつした子弟教育を支える事業の

奨学金事業の内容

一環であった。ちなみに宗門では昭和十年(一九三五)立正大学宗学科生に奨学金を給付することが決められており、眞統会の奨学金事業はこつした宗門の動きに先駆けていたのである。

昭和十一年(一九三六)三月、眞師法縁の会誌である『眞統録』という冊子が発行された。この冊子から当時の奨学金給付の具体的な姿がみえる。

大正十三年度から始まる奨学金給付は、このときまで毎年行われた。第一回は二十五名に



身延山にある妙心院日眞上人の御廟にて。常円寺隨身生が毎年、清掃・参拝に訪れている。

人あたり三十円が給付され、以降、毎年およそ三十人前後に給付がされている。給付者は立正大学の学生を対象で、昭和十年度まで合計十二回で奨学金を受給された学生はのべ百四名にのぼり、給付総額は一万四百五十円であった。

ところで、当時の三十円というと、学生にとってどのくらい価値があったのだろうか。当時の物価と比較してみると、公務員の初任給が七十五円(昭和十二年)で、東京本郷での一ヶ月の下宿料金(四・六畳、三食賄い付き)が昭和十一年当時でちょうど三十円、そして、大正十四年の立正大学の授業料が年間六十五円であった。つまり、立正大学の授業料の約半分にあたる額が給付されていたのである。

また、『眞統録』には給付者の氏名も記録されており、常円寺では及川眞能師の徒弟四名が確認できる。その中には後に常円寺第三十七世となる及川眞学師の名前もみえる。

現代へ続く「奨学金事業」

時局が戦時体制へ向かい、日中戦争、太平洋戦争に入ると奨学金事業は停止されたと思われる。戦後、昭和四十四年に寄付行為の変更認可がおりているので、このときから事業が復活し、今に至るものと思われる。現在、奨学金は立正大学の学部生と大学院生、そして身延山大学の学生も受給するようになった。

常円寺に在籍した多くの隨身生もこの奨学金を受給した。奨学金を受給した者によれば、「奨学金をもらつたことで、これまであまり意識しなかつたことがなかつた」「法縁」といふものを意識し、自分が僧侶であることを強く意識するようになった」とつづである。

奨学金の給付は、受給する子弟にとって、僧侶としての勉強の経済的なバックアップを受けるといふことだけでなく、自分が師匠、さらには「法縁」に連なるといふ、自らの立つ位置を認識する機会であり、それを通じて僧侶としての自覚を強くすることにつながるのである。

(つづく)